

# JTA通信 第9号

開放系と意味の更新

2025年10月3日

## 作り方を作るという作り方

ピタゴラスイッチを作った佐藤雅彦氏の「作り方を作る」という発想が面白そうと思ってちよろっと調べてみると、いくつか出てきた記事の一つに「毎月新聞」という画像が張り付けられていた。

詳しくは分からないが画像から考えるに毎月新聞に連載していたちょっとした記事で、その内容としては数年前に会社の事務にアルバイトで来た若い女性が外国のちょっと珍しいパッケージのお菓子をみて「これ余ったら貰っていいですか、ほら、私たち学生ってこういうレアものに弱いじゃないですか」と言ってきた場面がから始まっていて、

そこから「欲しいなら素直に欲しいと言えばいいのに、それが図々しいと自分でもうっすら感じてるから「私たち」みたいに主語を広げてごまかそうとしてる」という方面に展開していく。

で、この話自体は別にどうでもいいんですが、これを読んで何か文章を書きたくなくなった。その2、3日あんまり書きたい感じになっていなくて、こういう時は大体、その塊一つを書くとか書かないというよりももう一つ二つ階層が上のところで考えの滞りが起こっていて、

というのは何のためにそれをやろうとしているとか、それをやることでどうなろうとしているとか、そういう抽象度の高いレベルでの動機とかゴールのようなものが更新されそうなタイミングで、こういうときはその階層での思考の乱雑さを鎮めることにエネルギーが費やされて、一番具体レベルの実際に今ここで手を動かして書くという行為がおろそかになる。

この時間にはいいも悪いもあって、そうやって方向性が微調整されることでまた気持ちよく書いていけることもあり、一方でそうやって滞ってる間も歩くのは止めないほうがいいのか、そういう時間を短縮するほうがいいのか、いろいろ考えようはあるがこう言う期間は定期的に発生する。

## 出来事が引っ張り出す流れ

で、それもどうでもよくて、考えたいのはそんな感じの期間だったはずなのに書きたくなくなったということで、そのきっかけがこの佐藤雅彦の「毎月新聞」のある月のある一か所であるこのアルバイト女性の話を読んだこと。

これを見たときに自然と思ったのは、この記事はどういう風にかかれたのだろうかということで、それは見ての通りで、「～じゃないですか」と言われたことをきっかけに、数年前のアルバイトの女の子から聞いたのが初めてだったことを思い返し、そこからその言い回しについて佐藤氏が考えていったことが書かれている。

ここでいくつかおもったことがあり、まずはそういう日常のイベントを書く事から始めるというやり方があって、というか何個か言いたいことがあり、まずはこの少し前に「書くことが先にあるのではなくて一行書いたことで次に書きたい一行が出てくる」ということを考えていて、でもそうはいつでもなんか書ける感じじゃない時には「そんなこと言われましても」って感じになるのだが、でもそういう話がまず頭にうっすらとあり、

そして次にこの毎月新聞の話を見たときに、じゃあいったん最近あった出来事を書き始めるやり方があって、そしてそれは面白そうなのではないかと思った。つまり、直近の出来事をまず書いてみて、その書いたことに引っ張られる形でもう一步先の書きたい気分が生まれてくるという感覚。

で、そう思ったときにさらにまた思ったのは、じゃあなぜそんなことまでして書きたいのか。別に誰に言われるでもなく勝手にやっているくせに勝手になんか書けない、みたいなことになり、でもなんか書きたいみたいな感じで乗り越えようとしていて、なぜそんな意味の分からないことをしているのか、と思ったが、

例えば、経済の領域で人は感情で買って理屈で正当化されると言われたり、作家の江藤淳が「作家は時間を作り出すものである」というように、書かれたものがその後どう使われるかという理屈を整える前に、それが書かれている時間、そこにある時間の流れ、それが作り出す現実に参加していく、それを書くという運動と時間を過ごすことが根本にある。

つまり、面白いからということではなくて、で、また少し前に話を戻すとそうやって最近あったことや考えたことを、それによって何かたいそうなことを言おうなどと思うことなくとりあえず書き始めてみることで、それに引っ張られる形でその周辺で浮かんでる何かが出てくるという書き方が面白い気がした。

## 第三者の目による緊張感

というわけで、少し前に、西アフリカに行った友達が現地で購入してきた民芸品を西アフリカ展という形で店に卸してちょっとしたイベントをする機会があり、そこに行ってきた、その時に彼の後輩もいて三人で店内で喋っていたのだが、その様子を宣伝も兼ねてインスタライブで配信するのが面白いのではないかという話になった。

別にいきなり配信したとて数人も見るかどうかだが、自分たちからすれば誰かが聞いているのかもしれないので多少の緊張感が生まれる。三人で閉じた形で喋っていたところから第三者(この場合は三人で喋ってるので第四者かもしれないが)の存在が意識の上では誕生し、強引に開かれた形での対話というか談笑に変化する。

この緊張感がよくて、いかに今ある系の外に繋がっていくか、基本的には「箱から出る」のように外に出ていく話をこれまでよく考えてきたが、自分自身が直接出ていくことはまた別に、外側にある存在と触れていく形もあって、この場合では「そのライブ配信を見てるかもしれない誰か」がそれにあたる。

ここで、実際に誰かが見ているかはどうでもよくて、自分たちで喋っている間は今何人ぐらいがどんな感じで見ているのかは全く分からず、でも誰かが見ているかもしれない聞いているかもしれ

ないという意識の上での第三者の存在によって、安易に今現場にいるその三人だけに共有される話をするとはなくなる、

すると当然いつも通りの話題や話の進み方ではないわけで、それは精神的に今いる箱の外に流れ出していく感覚で、ふたされて密閉されていた箱が大海に向けて扉を開け、まだ箱の中にはいるでも外から水の流入があり、つまりこれが第三者的存在で、物理的には箱の中であったとしても、情報空間において箱はこじ開けられ水やその運動によるエネルギーの流入があり、境界で発生した渦は僕たちを巻き込み間もなく海に放り出される。

## 他者とは何か

この外に開かれることの緊張感が大事で面白く、これまたちょっと前に読んでいた柄谷行人の『探求 I』では、「他者」として「自分と言語ゲームを共有しない人」という言い方がされていた。

「言語ゲームを共有する」とは、その言葉の意味や定義や使われ方が十分に共有されていることで、よく話をする人や身近な人とは例えば、「遊びの話をしているときにお互い旅行のことが頭に浮かんでる」とか「仕事の話の時にお互いに会社員のことをイメージしてる」のようにそのコミュニケーションの手前に認識の共有があり、それが言語ゲームを共有する人である。

このとき、他者と喋っているようでいて実は「自分と同じ共同体のメンバー」でしかない、他者とはこの共同体の外にいる人物のことで、この、「異なる共同体間で行われるコミュニケーション」が本当の他者とのやり取りである。

それは子供や外国人と話すときのように、普段当たり前のように使っている言葉の一つ一つがすべて通じない場合に代表され、そのとき「話す—聞く」ではなく「教える—学ぶ」という関係になるものだ、という風にこの本では展開されていく。

ここでは人とのコミュニケーションとして、「言語ゲームを共有していない、共同体の外にある他者」を考えたが、コミュニケーションに限らず共同体の外、今ある領域の外部とのコンタクトに意識を向けていく。

## 想像上の気まずさと緊張感

この前、おばあちゃんを病院に送迎するときに、いつもと違う道で行ってみようと思った。ふとといっても実際にはかなり意識的に違う道から行こうとしたのだが、僕はそれほど運転に慣れていないので通ったことのない道を通ろうと思うとかなり緊張感がある。「狭い道で向こうから車が来たらなんかバタバタしそう」と、違う道で行ってみようと思った瞬間に想像することになる。

するとその想像上の現実での気まずさとかあたふた感を回避しようとしてやっぱりいつも通りでいかと考えそうになるが、このちょっとの緊張感が今ある閉じた系をこじ開けるトリガーになる。別にそれ一回で何かありはしないが、常日頃から意識してこの緊張感を作りに行く感じさせに行くことで、これが正常な状態であることを思いこませる。

閉じた系の外に飛び出ていくには、バンジージャンプ的にいきなり大きなイベントに決死の覚悟で参加していくほかに、まずは開放系にするというのもある、つまり、いきなり派手に進撃の巨人で言うところのウォールマリアを飛び出して壁外調査に行く以外にも、いったん鍵を外し扉を開け巨人が入ってきてしまう状態にしておく。

そして冒頭の話に戻れば、こうやって適当に日常の出来事を書き始めることで引っ張りだされる話題は大いにある。

## 意味の解体と自分中心の再構築

何か書きたい感じが出てくるかと思って、大量に並んだタブを一つずつ確認しながら閉じていったが期待した効果は得られない、というわけで、昨日図書館で借りてきた遊牧民についての本を読んでみる。

今週は鹿児島に出かける予定で、大阪から12時間の道を3人で交代しながら進む。2か月前ぐらいまで運転はあまり自信がなかったのに隣に誰かがいるとき以外は極力避けていた、が、漠然ともう少し運転出来たほうがいいような気はしていて、無意識のうちにそんなチャンスを探っていたのかもしれない、

そんなときにたまたまおじいちゃんとおばあちゃんが病院に行かないといけなことがあり、平日にずっと動けるのが僕だけだったので二人を乗せて運転することになった、これはある種の強制力で、これによって一人でも問題なさそうな感覚を得た、鹿児島に行くことになったのもそんな流れを受けてのことである、

そして車で移動することを中心にした生活のことを考えて見たくなり、例えば道の駅に車を止めれば、この車は家と解釈できるわけで、そのように身の回りにあるアイテムや概念のこれまで当然のこととして受け入れてきた用途を一度解体し、全て自分都合に再解釈する、

そう、僕たちが生まれてきた世界があり、その世界で何十年何百年と先に誕生していたそれらの存在は、それまでの世界ではそう捉えられそう利用されてきただけで、それは世界や社会や大衆とその存在の関係であるが、僕たちとの関係ではない、

だからそれらとの関係はなんとなくそう思っているいわゆる常識というものを取り外せばいくらでも更新可能であり、勝手に自分に都合のいいように使えばいいことになる。車は家であり図書館は本棚であり畑は人がそこで関係を持つ場である。

コンセプトがほぼすべてのような気がしないでもないが『半農半xという生き方』という本を読んでいたレイチェルカーソンの『センスオブワンダー』とヘンリーソローの『森の生活』が紹介されていた、そういえば、海辺での暮らしについての本はあんまり見たことないなと思い探してみると、ビーチに家を建てて一年間過ごした『The Outermost House』と無人島を買ってそこでの暮らしを書いた『Sea Room』が見つかった、この辺りは生活を解体して組み直すときには役に立つかもしれない。

## 「それってあなたの環境だからですよね」という大間違い

ある分野に長けた人やその道のプロが人にアドバイスしたり、自分がどのようにそれらに取り組んできたかを語る場面でよく出てくる反応として、「それってあなたの状況がよかつただけですよね」というのがある。

例えば、アスリートなら両親もアスリートだったとか、ミュージシャンなら幼少期から家に楽器があったとか、そのレベルではなくても隣の家にアメリカ人が住んでたから英語しゃべれるようになったとか。

別にプロとかの話に限らず、誰かが自分のやりたいと思った何かを実現できた時の反応として、「その環境にいたのがラッキーだったただけですよね」とか、「でも自分がそういう環境じゃないから参考にならない」「だから自分は出来ない」というような反応。

これありがちだが、全然間違っていて、流石に大谷翔平に誰でもなれるわけではないがそんな極端な話を考えたいわけではなくて、というか大谷翔平は見方を変えれば何万角形の人間のパラメーターの中から野球とそれにまつわる部分だけをそれこそ人間に可能な限界ぐらいまで伸ばしその他をばっさり切り捨てるような振る舞いをしてきたとも見れるわけで、この文脈においては考慮することでもない。

例えば、畑をやりたいと思ったとして、でも都会に住んでるからできる場所がないとか、自然が好きだが周りはビルばかりとかそういう時の心の持ちようの話。このときはその環境だからこそその選択肢が必ずあって、それを探しに行く。

誰かがやったことを見て全く同じことをしようとしても、その人の暮らしている環境や本人の性格や考え方の癖など大量の変数があるから完コピは基本的には無理で、でも自分の環境だからこそその選択肢というのは必ずある、これはもう必ずで、だからそれを探そうとするかどうかの違いでしかない。

## その環境だからこそその利点と急所を狙う感覚

この感覚について考えるときにちょうどいいのが将棋で、プロや強豪のアマが考えを話してるのを聞いてると、常に相手の弱点を探している。将棋には攻めと守りの2つのパートがあって、守りなら例えば王様をどこに囲おうかという問題で、このときどんな囲いにも弱点は必ずある。

端っこに王様を寄せてガチガチに囲おうと思えばその分速い攻めには弱いし、その端っこから攻められても弱くなりやすい。駒一つで見ても、例えば桂馬は上方向には動けないので、雑に言えば真正面からだ最弱の歩でもその局所的な勝負では勝てることになる。

で、一手指すごとに、それによって生じたマイナスな面というのが必ずあり、それを探していくような考え方をすることが多い。今この手を指したということは、それによってこっちが弱くなったからこっち側から攻めよう、という感じで。

他にも将棋には「駒落ち」という仕組みがあって、棋力に差があるときに強い側がいくつかの駒を無しで戦うハンデのようなもので、プロになるような人はこういうのを小さい時からやっていくらしいが、これをやるとその急所を狙う感覚が育っていく。

通常の状態からの差がそこには生じていて、その差が何を意味するのかを考えることになる。例えば端っこにあるはずの香車がなければ明らかに端っこが弱いわけで、そうやって各場面ごとに、今のこの状況ならどこに焦点を当てればいいのか、何をこっち側の有利として考えて攻めていけばいいのか、そこからまた一手ずつ進めば、そのやり取りによって状況はどう変化して道が弱くなったり強くなったりしたのかと考えていく。

自分の環境でベストな選択肢を探していくのはこれに近くて、どんな環境にも、明らかな外れ値というか極端なものは除くとしてもその環境だからこそその利点が明らかになって、これはそれが明らかにあると思っていないと見つからない。

例えば、最近だと畑をやってみようと思ったがそんな大自然に囲まれたようなところでもないのが意外となくて、それで探していたら手伝いの募集を見つけたのでそこに参加させてもらうことにした、で、そこから普段の移動中に周りに目を向けると、意外と実は畑がいっぱいあったことに気づいた。

道路のちょっとしたスペースでも野菜育てたりしていてこんだけあればもうちょっと近くでもあるんじゃないかと思ってまた探していると市民農園を見つけて、この市民農園も最初は場所の割に値段が高くて微妙に思っていたが、それとは別の、webのかなり狭い場所に押し込められていたようなページを発見してとりあえずそこで借りることにした。

## 「自分に合った実現の形」は意外と簡単

これも結局は意味とか概念とか方法の解体で、何かしたいと思ったときに真っ先に思い浮かぶ実現の形は大抵これまでにどこかで見聞きしたものである。

無人島でサバイバル生活をしたいと思えば「黄金伝説」のよゐこの映像が浮かぶかもしれないし、ギターをやりたいと思ったらフジロックで何万人とかの前で演奏してる姿が思い浮かぶかもしれないが、そして別にそれ自体は問題なくて、むしろ最初はそれぐらいに大きく考えないことには動き出すエネルギーが出てこないが、

多くの場合はそこから今の自分でどうしていくかと考えたときにそれらと状況が違いすぎて自分の環境ではできそうにないと思ってしまう、でもそれは今の自分やその周囲の環境を中心に置いて、その対象の定義を書き換えれば解決できる可能性が高い、

例えば無人島ので言えば、「テレビ番組の一つの企画としての無人島生活のイメージ」を物理世界に現象化させたものであり、これは無人島生活のアイデアみたいなものを「テレビ」とか「マスメディア」の文脈で切り取ったものでしかない。

数学で言えば、あるベクトルにx軸の単位ベクトルをかけてx成分だけ取り出してくるようなもので、でもこの宇宙には人の数だけその人生の方向を表現する単位ベクトルが存在していて、今知っているすべての対象はこれまで自分以外の誰か(もしくはある集団)が彼らの単位ベクトルをかけてその軸の成分を取り出してきたものでしかない。

仮に、

無人島生活のアイデアベクトル = (5, 8, 9)

ある人間の人生のベクトル = (1, 0, 0) とすれば、

その人間が満足できる気持ちのいい無人島生活はこの二つの掛け算で「5」となる。この「5」という無人島生活を実現するために頭を働かせて工夫することがその人にとっての遊びであり喜びであり、そしてそんなことぐらいは身の回りをよく観察すれば最初に手を付けるべきことは見えてくる。

自分軸の単位ベクトルを掛け算すれば異なる値が出力されるのは当然であり、自分を中心においてそのフィルターをかぶせ、常識から逸脱した発想や使い方を見出しても何の問題もない、むしろ個人で動くからこそそれが重要になってくる。常に今の環境だからこそその選択肢を探しに行く。

## 5キロ圏内探検実験

### 数字で考える

最近では数字で考えることに面白さを感じている、面白さというよりも数字に変換すると現実を引き寄せて考えることになるというのだろうか。そもそも言葉というのは具体的なもので、人は言葉によってものを認識する。そして言葉にすることで具体的になる。

例えば将来のビジョンを描くにしても映像として見ているうちは抽象的だがそれを言葉の形にすると一気に具体的になる、と言ってもこの場合は注意が必要で、そういった未来のイメージなどは言語にしてしまうことでその言葉に縛り付けられることが出てきかねない、映画監督の絵コンテの様に一枚絵として漠然と思い描くのがいいこともある。

ただこれについても細かい話ではあるが、漠然と描くと言っても見ているその絵は極めて具体的で、どんな環境で周りに何があって誰がいてそこで何をしているのかが絵とか場合によって映像の形で見えていることが望ましい。

というか、そうならないことは今の現実とつなぐことができないのであり、そしてこの現実との接続においてもどう動くべきか何をするのかをはっきりと言葉にできたときにはじめてそのように振舞うことができる。

よく習慣化などの文脈で出てくるように、ぱっと動けないものは今の自分にとってサイズが大きく、もっと細かく分解する必要があるがあって、例えば、「勉強する」というフレーズでこれからやることを確認してすぐに動ける人もいれば、「数学のこのテキストのこのページを開き、左上のこの問題から始める」と、ここまで言葉にして初めて動ける人もいる。

そして後者の場合は言語でより具体的に考えたことになる。さらにそのテキストを1か月で進めるとすれば進めたいページ数を30日で割って毎日のページ数を算出する。この時、数字で考えることで具体的に言ったと言える。数字は抽象的な概念で、「ゼロの発明は素晴らしくて～」という話はよく聞かすが、生活においては数字にすることは具体化を意味する。

昨日、『ウォールデン 森の生活』という、森の中の湖のそばに自分で家を建て2年間辺りを散歩などして過ごしたソローの本を読んでいて、と言っても最初の3ページぐらいしか見てないのだが、表紙の分厚い紙をめくって2ページ目に「コンコードの地図—ソローの人と自然の探検地」というマップが挟まっていた。

これはソローが森を散歩したり動き回るその行動圏や町の地図で、まだ本編は一切見てないのだが意外とソローが生まれた家やその家族が住んでる場所から近いところに自分で家を建てて過ごしていたのだと知った。

そして左下に「この長さがだいたい1kmですよ」というメモリがあったのでそれに当てはめて考えてみると、ソローが山籠もりをした拠点から大体半径5キロ圏内に彼が探検した自然や村があるのだとわかった。そしてここでじゃあ自分が今住んでいるところから5キロ圏ってどれぐらいだろうかと思った。

## 家から5キロ圏内に円を描く

グーグルマップでは半径円を書くことができなかったの他のサイトを探して5キロの円を描いてみると、面白いことに普段自転車で行くギリギリの場所がその内側に入っていた。自転車でギリ行こうと思えるところ、そこを超えるとフラっと行ってみようとは思わないちょうどところが5キロ圏内であった。

例えばちょうど家の近くに割とでかめの図書館があることにこの前気づいて、普段用事があるときは家から駅までとそこから電車でトータル50分ぐらいのところに行っていたが、自転車で25分のところにも十分な蔵書数のある図書館を発見したのでそこに行ってみた。すると後半ちょっと疲れてきてその辺が気軽に行ける限界だと感じていたのだが、それが家から直線距離で5.1キロでやっぱりここが5キロ圏の一番端だった。

そう考えたときに、実際にソローはどういう風に探検したのか分からないが、自分が居る街の5キロ圏内を散歩とか自転車で乗ってでも見て回るのは多分面白い。

「自分が居て、客観的なその町がある」という構図でこれまで過ごしていたが、自分を中心においてそこから5キロの同心円を、自分の中に盛り込むように、ホームというか体の一部というか、逆に自分の身体感覚を上げていったときに含まれる領域としてこの半径5キロの円で囲まれる空間を捉えてみると、客観的な街や施設、人、空間を自分の文脈に解体して編集することができる、

例えばこれはよく言われたりする気がしないでもないが、図書館だって離れにある書庫だと思えば自分の空間として入ってくるわけで、これは必死の思い込みによって現実をごまかそうとか、また別で「自分の物」という所有の感覚を得ようとかではなくて、自分の内と外の境界を広げていく思考である。

基本的には自分の皮膚の表面、ここを内と外の境目として考えがちだがそして僕も当たり前のようにそう考えてきているが、これはいくらでも伸縮可能で、自分自身の境界ではなくて家の概念の拡張と言ってもいいのかもしれない。

例えば、別荘を田舎の方に持っているとするればその周辺は自分のテリトリーとかホームになるが、もしその家を自分が使っていない間 Airbnbなどで貸し出していれば自分から見れば自分の家だが、他の人からすれば宿泊施設ということになる。

一つの物理的対象に複数の意味が重なっていてもおかしいことはなくて、これは図書館を自分の書庫だと考えるのと何ら違わない。もっと言えば、5キロ圏内にあるのなら、離れや別荘などでもなく自分の家なのである。

ついでにこの図書館の帰りに行きと違う道をだらだら自転車をこぎながら帰ってきたのだが、そこには全然知らない町があった。その辺は基本的に車で遠出するときの大通りしか僕との接点はなく、その車から見える両側の景色がすべてだった、

が、そこから一本外れたところを自転車でゆっくり見て回ってみると謎の中華料理屋とか銭湯とか革細工の教室みたいなのもあって、いや、そんなものぐらい別にどこでもあるでしょうって思われるかもしれないが、

でも今自分が居る場所を中心にして、そこにピンを刺し、そこから5キロ圏が自分の街だと解釈を編集したことで、どこにでもある一つの店も直接に自分と関係を持つ存在に上書きされる。

「客観的な動かざる冷たい物質」ではなくて、「自分と糸でつながっているが、まだこちら側から熱を送っていないために動いていないだけの何か」に変化する。

「5キロ」という数字で自分を取り巻く環境を見ようとしたことによって自転車で見て回るという具体的な動きへの意欲が生まれた。面白そうな妄想と現在の自分をつなぐのは数字による具体化である。